

# 『孤母社会 母よ、あなたは悪くない!』

高濱正伸

●講談社+α新書・八〇〇円

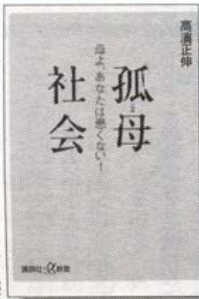
## 母子密着の日本文化を捉え直す

評者 文芸評論家 縄田一男

『成熟と喪失―母の崩壊』が講談社文芸文庫に収録された時、江藤淳は巻末の「著者から読者へ」の中で、「母」の崩壊と「父」の不在という、一九六〇年代半ばには文学作品の作品空間にだけ書かれていた虚構上の現象は、以後ほぼ三十年のあいだに日本ではごくありふれた一般社会現象となり、定着した」と記している。一九九三年のことである。

敵とした家長制度がありながら、母子密着型の日本文化の中では、「母」の崩壊なしに成熟はあり得ないとしたこの一巻のテーマ―それは、この作品がはじめて刊行された一九六七年においては、文学という知の領域のみが感得していたものであり、もしそれが一般大衆のあいだにあつたとしても、見て見ぬふりをされたり、何か別の意味づけをされていたように思われる。

の人間関係が崩壊し、時にはそれが家庭内の、もしくは外に向けての殺意として顕現するようになった今、「母」なるものに対する問題は、もはや知的レベルを超えた日常のそれとして私たちの身近にある、といったいにはあるまいか。「孤母」とは耳慣れぬことばだが、著者はこれを、核家族化、地縁の希薄化、夫の無理解等によって、孤独な子育てを強いられることになった母親と説明している。そしてこの孤獨は既に内在的な病理ともいふべきものとして存在し、しかも「孤母」



高濱正伸  
母よ、あなたは悪くない! 孤母社会  
たかはま・まさのぶ 一九五九年、熊本県生まれ。九三年、小学校低学年向けの作文、読書、野外体験などを重視した「花まる学習会」を設立。

は第二世代になっているという。つまり、現代の「孤母」は「核家族」という閉じたカプセルの中で、周りとの関わりが苦手な子どもが量産されるという経済成長期の負の遺産」の影響をモロにかぶった第二世代であるとのこと。換言すれば、江藤が論じた「母」たちから生まれた子供たちになる。しかも現状は、江藤が論じていた頃とは決定的に違う「頼り合うことを苦手とする人たちが「天人」と呼ばれる時代となり」、一見、便利に見えつつ、実は人間の関係性を複雑化、もしくは空洞化させかねない「ゲームやインターネットなど、よりパーソナルな世界に没頭し」「だからこそ助け合う喜びを切実に求めている」子供たちに、生きる人間のぬくもりを与えねばならぬことが大人たちの役割となっている。

しかしながら、前述の「孤母」の子育てへの無理解・無関心―特に共同体におけるそれが、ひきこもりや家庭内暴力、そして時には、崩壊してしまつた母による殺人すら引き起こしてしまふ。ここで私たちは、本書が、お受験殺人として世間を騒がせた音羽幼女殺人あたりから筆を起こしていることの意味を考えるべきであろう。この事件の加害者の母親に多くの同情の声が寄せられたことを含めて、私たちはこうした事件が起こった時に、何てことを、ではなく、何故なんだ、ということに熟考することをあまりにも放棄しすぎてはいなかったか?

ここで小説との関連を云々すれば、宮部みゆきがかなり初期の作品において、あり得ないような事件を起こすのは想像力(その基本は人の心を思いやることであろう)の欠如した世代であると断言し、また山本一力が、「あかね空」以来、物語の中で「家族力」を提唱していることが思い起こされる。が、著者が行おうとしているのは、小説に描かれた理想を実際の教育の現場において現実に取り戻そうという腐心であり、常にそこには生身の人間の切れれば血の出る思いが存在する。

むかし、ある西部劇で、主人公が悪さをしていたチンピラを殴るシーンがあり、「なぜ俺を殴るんだ」と問われるや「お前の親が殴らなかつたからだ」と答えたことを思い出す。

長谷川伸の「嘘の母」の時代は既に遠し―が、母子密着の日本文化を成熟のための喪失ではなく、成熟のために必要不可欠なものとして捉えなおすことこそ急務ではないのか。そこにこそ希望がほの見えたと著者はいつているように思えてならない。